

# ふるさと唄紀行

県内各地に残る民謡やわらべうたは、懐かしい風景や当時の暮らしぶりを伝えてくれます。  
うちな〜の唄が誘う地域の旅へ、まじゅん行かな(さあ出かけまじょう)!

## うるま市具志川のわらべうた

### 「ゆうなんぎーハーメーハーメー」

### 「牛モーモー」



のどかな風景の中でわらべうたを唄いながら遊ぶ子どもたち

子どもたちのユニークな観察眼がうかがえる、具志川のわらべうた

初夏から秋にかけて黄色い花を咲かせるゆうなの木は、沖縄では昔から家々の周りや海岸の近くに植えられ、防風林などに使われていました。

ゆうなの木の葉にとまる、背中の丸まったゾウムシを子どもたちは、見つけて手にとって遊ぶ中で、ゾウムシの身体にあるたくさんの黒い斑点が、お年寄りの手や顔にできる老斑(シミ)に似ていると発見したのでしょうか。ゾウムシに「ゆうなの木のおばあさん」とあだ名をつけるなんて、すごい発想です。「ゆうなんぎーハーメーハーメー」は具志川地区特有の唄で、特に天願や栄野比、川崎などでよく唄われており、子どもたちは手をたたき唄いながらケンケンをし、友だちと足を掛けあって遊んだと伝えられています。

一方の「牛モーモー」はメロディは同じですが、地域によって歌詞が異なります。具志川上江洲では、かかしを「田ーぬタンメに綱引かち」と唄い、田んぼのおじいさんとしておもしろおかしく擬人化しています。子どもたちの大らかなユーモアが伝わってきます。天願などの地区ではこの歌詞が「村ぬ鼠小(ムネチユウワ)にすびかてい」となり、ネズミのような小さなおじいさんが、大きな牛を引いている様子が描かれています。

二つの唄から見えてくるのは、昔の具志川ののどかな風景です。ゆうなの木の周りでケンケンをしながら遊ぶ子どもたちの楽しげな姿や、牛がモーモーと鳴きながら田を耕している牧歌的な情景が浮かんできます。

「ゆうなんぎーハーメーハーメー」

※ゆうなんぎーハーメーハーメーとはゾウムシのこと。

ゆうなん木婆前婆前  
いくちないみせーが  
十二ちぬ

ブットウーテンテン

(標準語訳)

ゆうなの木のおばあさん  
幾つになりましたか  
たくさんポツポツテンテン

「牛モーモー」 ※具志川上江洲の牛モーモー

牛モーモー 鼻ぶがち  
田ーぬタンメに綱引かち  
牛モーモー 鼻ぶがち  
太鼓ぬ鳴たくとう  
ンモーンモーンモー

(標準語訳)

牛モーモー 鼻をひかれ  
かかしにつながれて  
太鼓がなったから驚いて  
ンモーンモーと鳴いてるよ

※わらべうた 調査採譜 ● 宮城葉子

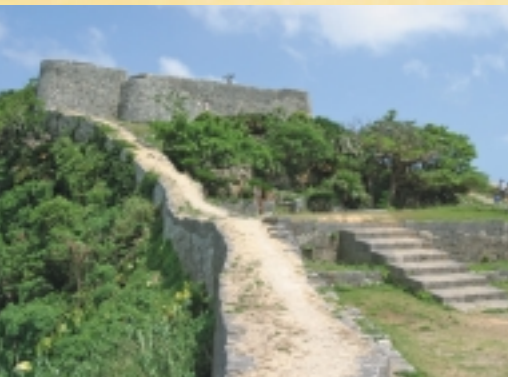
## 珊瑚礁に囲まれた美しいまち うるま市

- 面積——86.01km<sup>2</sup>
- 人口——116,807人(平成19年5月1日現在)
- 市鳥——チャン
- 市花——サンダンカ
- 市花木——ユウナ(オオハマボウ)
- 市木——リュウキュウコクタン
- 市魚——マクブ(シロクラベラ)
- 市蝶——オオゴマダラ
- 市貝——トウカムリ

### 珊瑚礁に囲まれ、「8つの島々」から成る個性的な市

那覇市から北東へ25km、沖縄本島の東海岸に位置するうるま市は、平成17年4月1日に具志川市・石川市・勝連町・与那城町の旧4市町が合併して誕

生した新しいまちです。公園や植物園、ゴルフ場などの娯楽施設をはじめ、歴史的な遺跡も多く点在する他、東南に伸びる勝連半島の先には8つの島々があり、このうち平安座島、宮城島、伊計島、浜比嘉島、藪地島とは海中道路や橋によって結ばれています。



### 伝統の品から新しい特産品まで「自慢のうるま市産」

県内生産量の95%を誇るビーグ(い草)は約130年の歴史があるといわれ、うるま市産は特に色持ちや香りが良く上質なのが特徴です。また、甘くて柔らかい津堅島のにんじん、沖縄在来種としてはうるま市のみで栽培されている「山城茶」などの農産物、ギネス認定を受けた世界一ミネラル分が多い塩「ぬちマース」などが有名。他にも、沖縄の青い海をイメージした琉球太田焼や、琉球王国時代からあるといわれる伊波メソ織などの工芸品まで多彩です。



### 娯楽と芸能——血湧き肉踊る闘牛や多彩な祭り



さまざまな芸能や文化が継承されており、全島獅子舞フェスティバルやうるま祭りなど、特色のある祭りが数多く開催されます。また、古くから沖縄の大衆娯楽として親しまれてきた闘牛が盛んで、「闘牛王国」の異名も。シーズンになると、市内の各闘牛場には県内外より多くの闘牛ファンが集まります。